

ドキュメンタリー映画上映&トーク

それでも私 *Though I'm His Daughter* は

オウム真理教教祖故松本智津夫(麻原彰晃)死刑囚の三女として生まれた松本麗華さんは、父逮捕時12歳。事件の真相を求め続けるが突然の死刑執行。差別と排除、バッシングを受け続ける加害者家族の現状を通じて死刑について考えます。

**入場無料
予約不要**

2026年

2月28日(土)

13時-16時半

(12時半開場)

宮日ホール

(宮日会館11F)

オンライン配信は
ありません

プログラム

13:00	開会
13:05	映画上映 (119分)
	休憩
15:15	トーク (70分)
16:30	閉会(予定)

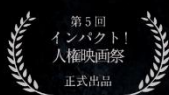
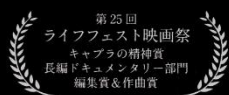


宮日会館(宮日ホール)

宮崎市高千穂通1-1-33

※駐車場はありません。

近くの有料駐車場をご利用下さい。



社会は彼女の人生を
許さなかった

「父の名前は、松本智津夫。」

“麻原彰晃の娘”として生きること強いられた彼女の41年

監督・プロデューサー：長塚 洋 撮影：長塚 洋、木村 浩之 編集：竹内 由貴 音楽：上畑 正和
配給協力：きろくびと 制作・配給：Yo-Pro 2025年1月119分
www.iamhisdaughter.net

まつもと り か
松本麗華さん



松本智津夫の三女として生まれ、父は後に麻原彰晃を名乗り、オウム真理教の教祖となる。大学で心理学を学び、2015年に手記「止まった時計」を出版し、自らの体験を社会に公表。以降、実名で活動続け、メディア出演や講演、執筆を通じて社会との対話を重ねている。その他の著書に「被害者家族と加害者家族死刑をめぐる対話」（23年、共著）、「加害者家族として生きて」（25年）があり、個人としての歩みを発信し続けている。こころの談話室あかつき相談員。一般社団法人共にいきる理事。

ながつか よう
長塚洋さん



10代から小型映画を制作し、早稲田大学大学院で映画学を専攻。民放キー局で事件・事故報道に従事した後、2005年よりフリーランスに。テレビ、映画、Webを通じて人間と社会の在り方を問い続けるドキュメンタリーを発表。また『生き直したい』（17年、大阪ABCテレビ）で坂田記念ジャーナリズム賞を受賞。近年は死刑制度をテーマにした映画制作に注力し、『望むのは死刑ですか 考え悩む“世論”』（15年）、『望むのは死刑ですか オウム“大執行”と私』（22年）を発表。後者は米国のThe Awareness Film FestivalでMerit Award of Awarenessを受賞。本作では2025年EBS国際ドキュメンタリー映画祭（EIDF、韓国）にてスペシャルメンション（特別表彰）などを受賞。

娘なことは、罪ですか？

ない。死刑の前に治療して事実を話させて欲しいとの彼女の願いに識者らも賛同し、真相を求め続けるが、間もなく突然の死刑執行。麗華は社会が父親の死を望んだと感じ、極度の悲しみと絶望のうちに生きることになる。それでも人並みの生活を営もうとするが、定職に就くことや銀行口座を作ることさえ拒まれる。国は麗華に対して教団の「幹部認定」を取り消さず、裁判所に不当を訴えても棄却されてしまう――。

1995年3月、日本を震撼させた地下鉄サリン事件。その首謀者の娘として生まれた松本麗華（まつもと・りか）は父親が逮捕された当時12歳。以来、どこに行っても父の名、事件の記憶、そして「お前はどうか償うのか？」という問いがつきまとってきた。
「虫も殺すな」と説いたはずの教団の信徒たちが起こした数々の凶行に衝撃を受け、父親が裁判途中で言動に異常を来したために、彼がそれら犯罪を命じたこともまだ受け入れ切れ



社会からの絶え間ない差別や排除の中、自らの生き方を模索し続ける6年の記録

加害者の家族が背負う罪とは何か。オウム事件を含む犯罪報道に長く身を置いてきた長塚洋監督（『望むのは死刑ですか オウム“大執行”と私』）が考え続けた当事者たちの事件後の人生。松本麗華と出会い、その答えを求めて6年間に渡り記録し続けた。社会が被害者の代弁者となり加害者の家族を責める。バッシングに負けずひたむきに自身の人生を築こうともがく麗華の姿は、この世界で苦しみながら生きている人に向けた希望のメッセージとなりうるか。